本当の自分

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本当の自分

【Ｎコード】
Ｎ０５２２Ｕ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
自分を取り繕いすぎて、彼氏とすれ違い、別れてしまった少女。
自分を見失い、雨の公園に立つ。
そこで、見知らぬ青年に声をかけられる。

※サイト、ｄノベ転載。

空は黒い雲が広がり、冷たい雨が静かに降る日だった。
ウェーブのかかった赤茶色の肩まである髪をぬらしたままにした少女――茜が、ブランコに乗って、雨に濡れていた。
彼女は、長い時間そうしていた。
ただ下を向いて、たまっている水溜りに目を向けていた。

ふと、彼女に降る雨が止まった。
「何してるの」
後ろに影ができて、声が頭の上から降ってきた。
茜がゆっくりと後ろを振り向くと、黒いボサボサ頭の青年がいた。
「風邪ひくよ」
青年はさらに口を開いた。
だが、茜がぼーっと青年を見ているので、彼は少し戸惑った。
そして、茜はすぐに視線をまた前に戻す。

「大丈夫。ありがとう」
それだけを、ぽつりと言った。

「大丈夫なわけないじゃん」
青年はそう言うと、茜に無理やり持っていた傘を持たせ、ブランコの隣に座った。
茜は驚いて、しばしぼーっと青年を見ていた。
「俺、すぐそこの整備工場にいるんだ」
「……」
茜は傘を返すのも億劫で、また視線を下げた。
「あんたが見えたから、ちょっと来てみた」
「……」

「……どうしたのさ。俺に話す義理なんかないかもしれないけど、知らないヤツだからこそ、話したらすっきりすることもあるだろ」
「……」
雨の当たる音だけが、辺りに響いていた。
「……おせっかい」
「よく言われる」
「損する性格だね」
「そういうのは気にしてない」
「……聞いて、くれる……？」
茜が、そこだけ恐る恐る、という風に言った。
青年は、口元をやや緩めて、笑みを浮かべた。
「……話せば。聞いてるから」

「私ね、失恋しちゃったの。なんか彼とすれ違ってばっかりで、いつもケンカばっかりして。いつもはその後、ちゃんと仲直りできてたんだけど、今回はもう、できなかった。限界だったみたい」
茜は静かに話した。
「何でそんなのと付き合ってたの」
「ひどい言い様」
「だって、お互いに認め合ってないから、ケンカするんだろ」
「……そうか。そうかもね。私達、意地っ張りだったのかな」
茜が自嘲的な笑みを浮かべて、悲しげに言った。

「それか、本当の自分を見せてなかったか」
青年の言葉に、茜の表情は強張った。
青年もそこで言葉を切った。
「本当の自分を出していなかったら、いつかどこかでぶつかってしまう。矛盾に」
「……」
「それが重なると、最初は小さなヒビでも、だんだんそのものを壊

す割れ目になる。恋人だけじゃなくて、友人だって家族だって」
「……」
「……あんたは、その彼氏の前で、本当の自分だったのか？」
青年の問いに、茜は答えることができなかった。

他人によく見られたい、というのは誰でもあることだと思う。
それが恋人ならなおさら。
だから、頑張ってオシャレをした。
雑誌を見て、季節の流行を調べて、服の出だした頃には店にチェックには行くようにしていた。
アクセサリーとかも、何が自分に似合うか、とか、毎日鏡の前で考えてた。
外見にも気を遣ったけど、性格も、彼に嫌われたくなくて、少し我慢していたことがあったかもしれない。
彼はどういう子が好きなんだろうか、と毎日考えて、彼の好きそうな子になろうとしてた。
かわいい女の子になろうとしてた。
だけど、それは本当の自分だったんだろうか。
それが当たり前だったから、どれが本当なんて、もうわからなくなってた。
でも、もしかしたら、やっぱり我慢してたんじゃないかって、今なら思う。
もしかしたら、それを彼は感じてたのだろうか。
それを、重荷に感じていたのだろうか。

「あれ」
青年が工場の入り口で休んでいると、見覚えのある人物が近づい

てきた。
「あんた、ここで働いてるんだね」
茜だった。
「まぁな」
青年は、横にあった缶コーヒーに手を伸ばし、飲んだ。
「そういえば、名前聞いてなかった。私、茜、東城茜っていうの。あんたは？」
「巡（めぐる）。菅原（すがわら）巡」
「そう。なんかあんたらしい名前ね」
「どういう意味だよ」
巡は皮肉げな笑みを浮かべた。
「特に他意はないわよ」
茜は、巡の手にあったコーヒーを取り、一口飲む。
そして、元のように巡の手に戻した。
「甘い。あんた以外と甘党なのね」
「人の飲んどいて言う台詞かよ」
巡は、思わず笑ってしまった。

「今日はちゃんと、本当の自分か？」
そして、少し間を置いて、巡は何気なく言った。
巡は一瞬驚いた顔をしたが、晴れやかな笑顔を見せた。

「まぁね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0522u/

本当の自分

2011年6月15日14時53分発行